

第 97 回 歴史リレー講座「持統天皇～皇位継承法を変えた女帝～」 瀧浪 貞子氏 (R4.10.16)

大海人皇子が近江朝廷を破ったのち天武天皇として即位した事件、壬申の乱（672 年）から今年（1350 年）という節目の年。この乱で非常に大きな役割を果たした人物が、奈良飛鳥と切っても切れない持統女帝です。彼女のドラマチックな生涯を通して奈良の歴史を振り返って頂ければ幸いです。

都を飛鳥から藤原に遷したことで知られる持統天皇は、女帝としては初の推古天皇から数えて 4 代目。女帝には文化的な事業を数多く手掛けた共通点がありますが、なにより最大の特徴なのが皇極・齊明天皇と孝謙・称徳天皇にみられる重祚ちゅうそです。重祚は男性天皇では行われていません。なかでも、女帝の在り方を大きく変えたのが持統天皇。皇位継承権を考えると、ある意味歴史の方向を決定づけた女帝といえます。

壬申の乱から 7 年後、天武天皇は持統皇后と 6 人の皇子らを伴い吉野に出かけます。その中には天智天皇の息子 2 人も含まれていました。天皇は彼らに「草壁皇子（天皇夫妻の一粒種）を中心に団結し皇位継承の争いごとをしない」と誓わせました。これが草壁皇子の跡継ぎとしてのお披露目である「吉野の盟約」です。

吉野は壬申の乱の際に大海人皇子（天武天皇）らが拳兵したゆかりの地。皇子は兄の天智天皇が息子の大海皇子を後継者にすると知るやいなや、吉野で出家暮らしを始めます。それなのに、いったん俗世間を離れた者が天皇の息子大海皇子を破って即位したことは、他ならぬ皇位の篡奪さんだつでした。このことから、「吉野の盟約」は天武天皇にとって禊の意味もあったのかもしれない。

さて、従兄弟かつ異母兄弟である草壁皇子と大津皇子はなにかにつけて競い合う仲でした。純粹でおとなしい性格の草壁に対して、大津は文武ともに優れた人徳者。石川郎女を巡る恋のさや当てにしても、彼女の心をつかんだのは大津でした。681 年、母の期待を背負った草壁皇子は 20 歳で皇太子となるも、5 年後には天武天皇が崩御。ところが、当時の慣例により 30 歳に満たない草壁皇子は即位できません。称制により期せずして天皇の執務に就いた持統の願いはただひとつ、愛息を一日も早く即位させることでした。そんななか、大津皇子が謀反を企てているとの密告を受けた持統は彼を自害に追いやったとされていますが、真相は明らかではありません。振り返れば、大海人皇子（天武天皇）らが不破から近江に攻め入った際の 70 日間、気丈にも桑名に留まり、大津皇子と寝食を共にした持統皇后は実の息子との才能の差を否応なく見せつけられました。この苦い経験が目の上のたん瘤だった大津皇子排除の下地になったと考えられます。

『日本書紀』には、持統皇后という女性の政治感覚は非常に鋭いもので、天皇を常に補佐したとあります。壬申の乱における彼女の決意と覚悟から、持統皇后こそが真の首謀者だったと主張する人もいるほどです。さらに、持統とともに吉野に隠遁した大海人皇子の振る舞いが「虎に翼をつけて放したようなものだ」と怪しまれた逸話は有名です。翼は一般的には馬を指しますが、のちの壬申の乱の成功を考え併せれば、妻の持統を暗喩したのではないのでしょうか。

しかし、ことは願ったようには運ばず、草壁皇子は 28 歳で夭逝。中継ぎとして執務をしていた母が女帝として即位しました。当時は譲位制度がなかったため、草壁が残した 7 歳の息子（のちの文武天皇）を無事成人させることに執着し始めます。そして 697 年、文武が 15 歳で元服すると同時に譲位が行われます。息子の二の舞を何としても避けたい持統は二大原則を破り、即位年齢の改定と譲位制度の新設に踏み切ったわけです。孫の即位を見届けて初めて、持統にとっての壬申の乱が完結したのでしょう。

その文武天皇も 25 歳の若さで崩御。残された 7 歳の息子（のちの聖武天皇）を無事即位させるために、祖母元明と叔母元正が持統に倣ってともに中継ぎ女帝となります。持統天皇の揺るぎない信念「女帝はあくまでも一時的な存在。天皇は直系男子こそが正当」が奈良時代に定着したことになります。持統の波乱に満ちた生涯から、女性として母として政治家としての奥深い力強さを感じて頂けたと思います。